

空



2012・12

SORA 46号

粕屋 長 憲 一

山を裂き村襲ひたるあばれ梅雨
 梅雨出水阿蘇の大地を切り裂いて
 大木を巻きこんでゆく梅雨出水
 まづ顔を拭いて蛙とび込めり
 弓を引く案山子の先の雀かな

福岡 樋口みのぶ

黄落や写真はいつも端にゐて
 立冬の花に添へたる悔やみ状
 老人に鳩のあつまる小春かな
 戒名を書いて覚ゆる冬日かな
 草を食む山羊にあごひげ冬ぬくし

長崎 鳳 蛮 華

初潮の入り来る堀の城下町
 親しさや野分の果てのただの雨
 ぐしよ濡れて露草の紺うつむかず
 単線の音を継ぎつつ大稲田
 こほろぎや目覚めし家の水の音

福岡 田代貞枝

臥す人にあふるるほどの秋櫻
 往診の医師が冷たき手を詫びぬ
 清けしや看護師の手は仏の手
 病窓の角より月の昇りけり
 胃瘻といふ命の支へ桃香る

須 惠 苑 実 耶

新涼や赤子乗せゐる太鼓腹

一睡の後の病棟夜長し

朝夕に三種の葉秋暑し

稲の穂や雀跳んだり溺れたり

秋出水畳の泥の乾きだす

東京 山 田 正 子

海鳴りの岩に少年憂国忌

待針のガラスの玉や一葉忌

人の世は短かくもなし秋の午後

決め事は後に回してとろろ汁

縁側に柿と夕日の残りけり

粕 屋 吉 田 菫

金風やどの老人も元氣よき

産土に良き名残れり神無月

命惜しつくづくをしと法師蟬

雄鶏が鶏冠を揺らす露の玉

秋祭笛吹く眉の上下する

千葉 原 友 子

秋澄むや桐の板乾す奥会津

横笛の指に月光走りけり

塵打ちの音澄む秋の畳かな

口もとを茶巾絞りに十夜婆

牛臥して風の花野に漂へり

福岡 亀井紀子

一族の終の板碑や鳥雲に

この道は隘路なりけり花八手

茶柱の朝より立ちて小鳥来て

吊り橋の前も後ろもななかまど

けふよりは二人なりけり日向ぼこ

行橋 安武晨子

空が濃し淡しと野萩咲きはじむ

秋暑し樹下それぞれに人を得て

秋嶺の威の冠さるる花頭窓

露天湯へ押す黄落の一枚戸

鴨来ると湖一碧を張りにけり

大阪 田岡千章

木椅子濡る銀河雫と申しけり

自転車は補助輪のまま鳳仙花

有耶無耶に話途切れぬ秋団扇

鶏頭や父性は本音洩らさずに

暫は水仕休めよ秋の虹

大阪 青木朋子

ひとまづはまつすぐ立つて秋の草

草の花友は祖父母に育てられ

遠き友思ふ花野に立ちしより

台所いつも濡れぬてちちろ虫

父母姉妹眠れる墓や青みかん

柏屋 秋 千 晴

東京 古川 夏子

残菊を束ねて道を広くせり

川筋の木造平屋烏瓜

霜晴れの参道にまだ湿りあり

穂芒や歴代総長侠客碑

吊り橋を渡りて更に紅葉かな

莫連や盃厚き濁り酒

猿田彦釣瓶落しの頬被り

馬市の男赤胴檜笠

鳩群るる日蓮像や冬ぬくし

芋洗ふ姉さかぶりや川の町

福岡 吉村 摂 護

山梨 野畑 さゆり

ぢつと待つ以心伝心虫の声

蛇笏忌や四方の山々うす紅葉

胸張りて鈴虫闇を震はする

富士の雪十日早きや蛇笏の忌

此の虫も美声の波に呑み込まれ

黄金田の中の一枚蕎麦の花

鈴虫の鳴かざる昼を熟睡す

稲架襖御嶽山の雲晴るる

稲熟るる揺れどほしなり送迎車

金賞のワインを酌みぬ十三夜

空作品抄
—
柴田佐知子抽出

ぼつかりと青空のある刈田かな

白息を棒のごとくに経了る

全て断つ修道院や蔦枯れて

鶉の声醒めぎはの夢真二つに



高倉 和子

中田みなみ

荒井千佐代

服部 早苗



死火山のふもと明るし花すすき

稲を干す棒の疲れてをりにけり

裏阿蘇の風となりたる流れ星

鈴虫に仕ふるごとく飼ひにけり

神々はざんばら髪や里神楽

金糸魚の刺繍のやうな筋目かな

泣きやまぬ妹憎し葉鶏頭

澄む水に火の色流す百の稚魚

次の世は夫看取りたし花八つ手

身のうちに暗き洩あり雪をんな

大木を巻きこんでゆく梅雨出水

田の神を押しやる勢ひコンバイン

黄落や写真はいつも端にゐて

柴田志津子

だいじみどり

野上 杏

松田明子

栗原京子

宮井知英

小林朱夏

矢野百合子

高倉恵美子

あさなが捷

長 憲 一

山内 碧

樋口みのぶ

単線の音を継ぎつつ大稲田

往診の医師が冷たき手を詫びぬ

新涼や赤子乗せゐる太鼓腹

海鳴りの岩に少年憂国忌

秋祭笛吹く眉の上下する

牛臥して風の花野に漂へり

一族の終の板碑や鳥雲に

露天湯へ押す黄落の一枚戸

木椅子濡る銀河雫と申しけり

台所いつも濡れゐてちちろ虫

残菊を束ねて道を広くせり

鈴虫の鳴かざる昼を熟睡す

川筋の木造平屋烏瓜

鳳 蛮 華

田 代 貞 枝

苑 実 耶

山 田 正 子

吉 田 菫

原 友 子

亀 井 紀 子

安 武 農 子

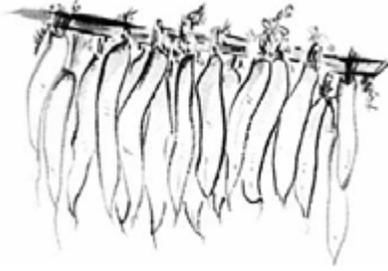
田 岡 千 章

青 木 朋 子

秋 千 晴

吉 村 摂 護

古 川 夏 子



黄金田の中の一朶蕎麦の花

どの汽車も線路に眠り天の川

狐火や死もて終りし恋の唄

看板は昔の女優椋鳥渡る

錦秋のまつただ中の川下り

昼の虫島に高波大明神

唐辛子掛け粗壁に日の上々

釣宿に強き雨音衣被

今日もまた誰かの命日萩の花

廃村に野仏一基秋の蝶

突風に乗つて小鳥の来りけり

うれしくて折つてしまひし初氷柱

レモン切れば香り裸身のやうに立つ

野畑さゆり

戸栗末廣

宮井知英

柴田志津子

苑実耶

松田明子

田岡千章

池田華甲

栗原京子

野畑さゆり

今井春生

あさなが捷

織田高暢

踏み出さば谷かもしれず真葛原

描き終はる頃にはしをれ白木槿

月満ちて家ぬち広くなりにつけり

みどり児や汗もミルクの匂ひして

秋蝶に米寿の笑みをおくりけり

年寄りも担ぎ出したり水喧嘩

八十路にもときめきのあり霜柱

秋澄むや名札つけたる同窓会

頬赤く掘りたる芋を母に見す

母の日の母が上座に落ち着かず

裏表見し松茸に刃を入るる

一と撫での雨に花野の輝けり

杖一本わが身としたり遊行の忌

青木朋子

白水良子

安武晨子

仲里奈央

小川涼

湯村栞

片田きく

石川叔子

乾有杏

岸千手

犬丸勝子

遠山のり子

古川夏子



ふるきうたうたひ秋の灯あたたかし

記念樹の真すぐに伸び神迎

神木の裾より朽ちて秋の風

満月や庭にもものけゐる気配

石段を登れば浄土菊まつり

人波に逆つて行く秋思かな

黄昏の秋蝶僧の袈裟に消ゆ

友を待つ秋風のホーム椅子固し

黒墓石桔梗の碧浮き立たす

右側は月光の窓今日も臥す

中原俊之

伊藤孝子

田邊豊子

木村信

堀川征孝

井手本恭子

山口弘子

ふじの茜

清水量子

神谷耕輔